和歌山県の部（二九社）

創業期	社名	所在地	代表者名	年令	代目	営業形態 卸売	営業形態 直売	営業形態 学給	技術系統
明治四三年	太田屋	和歌山市	水主安市	七八	初代	○		○	名方系統
〃四三年	西畑製パン	和歌山市	西畑駒蔵	七二	初代		○	○	木村屋系
大正八年	島津製パン	和歌山市	津野芳之助	七〇	初代			○	
〃一〇年	木下製パン	御坊市	木下常太郎	六四	初代	五〇%	五〇%	○	木村屋系
〃一四年	コイケ	和歌山市	小池種吉	六〇	初代		○	○	名方系統
大正年間	坂下食品	湯浅町	坂下政一	五四	二代	○		○	木村屋系
昭和二年	④製パン所	田辺市	南郷猪三郎	六八	初代	○			名方系統
〃二年	盛和堂	清水町	前久保久男	三七	二代	○			
〃三年	三栖製パン	御座川町	三栖助治	六一	初代	○			
〃四年	富屋	和歌山市	津田富之助	六二	初代	○		○	木村屋系
〃七年	富士製パン	和歌山市	西峰富次		初代	○		○	
〃九年	松山製パン	高野口町	松山茂	五三	初代	○		○	
〃一五年	杉原製パン	有田市	杉原憲四郎	六六	初代	○		○	
〃二〇年	新家パン店	和歌山市	新家英意	四四	初代	五〇%	五〇%	○	
〃二〇年	富士屋	和歌山市	宮前晴一	五四	初代	○		○	木村屋系
〃二〇年	スエヒロ製パン	有田市	上田渉	四七	初代	○		○	
〃二一年	藤井製パン	和歌山市	藤井忠夫	五〇	初代	○		○	
〃二一年	西畑商店		西畑駒蔵	七二	初代	○		○	
〃二一年	湯原製パン	吉備町	湯原定義	五八	初代	○		○	
昭和二二年	タツミ	和歌山市	巽秀治	五五	初代	○		○	和歌山
〃二三年	タツミ屋	那賀町	上久保巽	五二	初代	○		○	メカタ
〃二三年	室井製パン	南部町	室井賀寿雄	五五	初代	○			
〃二三年	〃	湯浅町	桑田茂一	四四	初代	○	○		
〃二三年	ますぎ	和歌山市	魚谷昌弘	五〇	初代	○	○	○	自己流
〃二三年	進々堂	和歌山市	浜田貞雄	四七	初代	○		○	
〃二四年	中田製パン	和歌山市	中田保一	四一	初代				
〃二六年		有田市	中上利雄		初代	○	○		
〃二七年	和田製パン	広川町	和田克己	三五	初代	○		○	自己流
〃三一年	㊗パン	和歌山市	西上静夫	三八	初代				

七、中国地方パン業界の歴譜

一、沿革

中国地方に最初にパンをもたらしたのは聖フランシスコ・ザヴイエルであつた。ザヴイエルが鹿児島に上陸したのが天文十八年（一五四九）であり、平戸にうつつたのが翌十九年であるが、ついで彼はこの年京都に上つて後奈良天皇に謁し布教の允許を得ようとした。しかし現実に京都に出向いてみてもはや天皇の実権がうしなわれてしまつていることを知り、朝廷との折衝を断念、ただちに引き返して山口に到り大内義隆に謁見、城下における布教の許可をとつた。キリスト教とパンと葡萄酒は不可分のものであるから、山口でパンがつくられたのは一五五〇年（天文十九年）ということになる。しかしそれから六年後の弘治二年（一五五六）にこの山口の会堂は兵火にかかつて焼失、宣教師のコスメデトレルらは豊後府内にうつつた。

しかし戦国時代には広島、岡山、鳥取などにも教会堂がつくられ、そこでパンが焼かれたものである。

これは鎖国と禁教によつて終止符をうたれたが、幕末になつてパンは再

び復活のきざしをみせた。それは兵糧パンというかたちにおいてであつたが、その兵糧パンをもつとも本格的に焼いた中国地方の代表的藩は長州の毛利藩であつた。その長州は撰夷の先頭に立つたが、撰夷に勝算なしとみた藩の首脳は文久三年（一八六三）に藩士十九名をひそかにイギリスに留学させた。その中には伊藤博文、井上毅、寺島宗則、森有礼、五代友厚その他の俊秀がいたが、これらの人々は帰国後パン食普及の先頭に立つた。

明治六年のヤソ教解禁以後は、中国各地に教会や教会関係諸機関がパン食普及の役割を果したが、その主なるものは明治十五年開設の高梁教会、同十六年開設の広島教会、十九年創立の広島女学院、二十年開設の岡山孤児院（石井十次）などである。

またアメリカからの帰還者や岡山、広島の師団、岡山、広島、山口の官立大学・高校などもパン食普及の役割を果たした。

中国地方のパンの現況

二、現　況

当地方のパンの現況はあらまし以下の通りである。

県別	総人口（千人）	市部（千人）	郡部（千人）	パン類総年産（屯）	内訳 市販パン（屯）	内訳 学給パン（屯）	県庁所在地	パン食指数	業者数	三〇一～五〇〇kw	五〇一～一、〇〇〇kw	一、〇〇〇kw以上	計
鳥取	五七九	二九五	二八四	四、六八九	三、三三七	一、三五二	鳥取	一〇八	七〇				〇
島根	八二一	四一三	四〇八	五、〇五四	三、四四三	一、六一一	松江	八七	九〇				〇
岡山	一、六四五	九五八	六八六	一、六、〇四二	一二、六四二	三、四〇〇	岡山	一〇七	一六五	二	一		三
広島	二、二八一	一、三三〇	九五〇	二二、一七九	一八、三一六	三、八六三	広島	一二五	二二五	一	一		二
山口	一、五四三	一、〇八五	四五七	一三、八二五	一〇、六九六	三、一二九	山口	八二	一二五	二			二
計	六、八七一	四、〇八三	二、七八七	六二、二三九	四八、八八四	一三、三五五			六七五	五	二		七
全国	九八、二七四	六八、一一〇	三〇、一六四	八六五、五八九	六八八、五〇三	一七七、〇八六			一〇〇七、八七〇	五五	二一	一二	八八
全国比	七・〇%	六・〇%	九・二%	七・三%	七・一%	七・一%			八・六%	九%	一〇%	〇%	〇・八%

以上の通りで中国地方の対総人口比率は七%であるが、対総製パン高比率は七・三%である。これは製パン高が若干全国平均を上廻つていることを示すものであるが、その内訳をみると市販パン七・一%、学給パンも同じく七・一%で、よく均衡がとれている。

このように当地方のパンが堅実な歩みをつづけているのは市部と郡部の人口比率が全国の標準型に近いからである。

つぎに県庁所在地のパン食指数をみると、全国平均を上廻つているのが広島、鳥取、岡山の三市であり、下廻つているのが松江と山口の両市である。

業者数の対全国比率は八・六%であつて、これは製パン高比率の七・三%を上廻つているが、これは零細規模の業者が多いことを示すものである。しかしメーカー規模をみると三〇一～五〇〇kw級五社、五〇一～一、〇〇〇kw級二社であつて、これは全国平均を上廻る数字である。

鳥取県パン業界の歴譜

一、

現存する鳥取県のパン屋の老舗は鳥取市徳尾の有限会社亀井堂であり、その日産高は約一〇〇袋、鳥取県第一の実績である。

亀井堂が鳥取市でパン屋商売にふみ切つたのは明治三六年の三月であつた。この店の開祖亀井貞蔵がパン屋をはじめたのは、当時鳥取市東町にあつた教会の牧師さんにすすめられたからである。その牧師さんはアメリカ人のバートレットという人で、この教会はいまも日本キリスト教団所属の教会として愛信幼稚園なども経営している。二代目亀井忠治さんのはなしによると、亀井貞蔵がパン屋を志したのは、教会の牧師さんにパン屋商売は将来有望だからだと説かれたからであつた。当時この牧師さんはパン屋がなかつたので、家僕を使つて家庭で自分がたべるパンを焼いていたらしい。そんな関係で亀井さんはその牧師の家僕からホップだねの食パンの製法を習得した。しかし当時の食パンの需要はまことに微々たるものであつた。従つてどうしても米粃だねの菓子パンを揃えなければ商売にならない。その菓子パンの製法を誰に習つたかは不明だが、おそらく京阪地方の職人を雇つたのだろう。

鳥取市の郷土史家四宮守正氏の述懐談によると「鳥取地方でパンの存在が農村にまでも知られるようになつたのは鳥取市に第四〇連隊が誕生した明治三〇年以後のことだ」とあるから、亀井堂が鳥取のパン屋の第一号というわけではないが、老舗中の老舗であることにかわりはない。

二代目の亀井忠治さんが鳥取運隊に入営したのは明治四二年であつたが彼はこの兵隊生活でパンが兵隊にとつての必需食であるとの確信を得た。この点について前記の郷土史家四宮氏はこういつている。

「亀井忠治さん（八二才）は、軍隊生活の体験から、若ものたちがはげしい教練のあとでほしがるものは甘いアンパンであることを痛感した。それで除隊後も本職のパン屋の使命として、ぜひ兵隊に焼きたてのおいしいパンを供給したいものと念願し、上官を説得して自費でもつて陸軍糧秣廠まで出かけていき、遂に全国にさきがけて、隊内でパン焼直営の道をひらいた。こうしてただたべることだけが楽しみの兵隊たちの願いはかなえられたのである」と。

しかしこれは酒保のアンパンで、給食の食パンではなかつたが、その結果は予想以上の盛況であつた。この点について前記の四宮氏はこういつている。

「大正時代の農村の子供たちが、休暇をもらつて婦る兵隊のおみやげとして待ちこがれたものは、まんなかにヘソのあるアンパンであつた。村の子供たちをよろこばせたものは、兵隊のもつている銃でもなければ腰のゴボウ剣でもなくて、甘酸つぱいような、日ごろ全く口にしたことのないヘソパンの香りと味であつた」と。

当の忠治老は「何しろ税金はかからない、配達費もいらない独占企業だから儲かりましたね」といつているが、これでみると軍隊がパン食普及の役割を果したことになる。

その忠治さんは鳥取県パン協の創立者であり功労者であり、現在も達者である。この人が産業功労者として勲六等旭日章をたまわつたのは昭和四二年であつた。

二、

亀井堂以外に老舗らしいものはない。従つて殆んどが新しい戦後派パン屋ということになるが、その総数は約七〇軒。人口は約五八万人だから八、三〇〇人につき一軒ということになる。従つて大部分は直売本位の小規模店ということになるが、その中から比較的大規模なメーカーを抽出すると、あらまし以下の通りである。

上位一一社の内訳

等級	社名	代表者	所在地
A	(有)亀井堂	亀井寛	鳴取市徳尾
〃	(〃)原田パン	原田友次郎	米子市阿部
B	(林)君司食品	田中志郎	鳥取市布勢
〃	(有)木村家	小椋俊明	米子市糀町
〃	(林)三共堂	原田豊次郎	米子市雨三柳
〃	(有)伯雲軒	山本昭二	境港市栄町
C	(有)だるま堂	山名早苗	鳥取市徳尾
〃	(林)宏栄	村上年光	〃 片原町
〃	青木製パン所	青木弘之	気高郡青谷町
〃	(有)寿屋	桒本周一	米子角市盤町
〃	(有)神戸ベーカリー	坂本定雄	境港市中野町

このうち米子市の卸業者は隣接の島根県東部地方に進出している。なおパン協はパン類自由販売以後、卸部門を株式会社「ケンパン」に再編成、現在も活発な商行為を行なつている。

(1) 組合史

発足　昭和二二年三月二八日鳥取県知事吉田忠一の認可を得て鳥取県パン商工組合を設立した。

発起人総代　柳沢愛之助（米子市）発起人　児島卯吉（鳥取市）亀井忠治（鳥取市）土井正吉（鳥取市）竹田春吉（鳥取市）藤田孟（倉吉市）

昭和二二年三月八日創立総会を開催、理事および監事を下記の通り決定する。

理事長　柳沢愛之助、専務理事　亀井忠治、理事　土井正吉、平野正行藤田孟、監事　竹田春吉、山本茂隆

この構成は鳥取県を東部（鳥取市、八頭郡、岩美郡、気高郡）中部（倉吉町（現在倉吉市）、東伯郡）西部（米子市、境町（現在境港市）、西伯郡、日野郡）にわけると（現在もこのわけ方が基本となつている）東部理事三名、監事一名、中部理事一名、西部理事一名、監事一名となる。

組合員の構成は東部一八名、中部五名、西部三名の二六名

出資金および出資口数

出資金は一口一〇〇円で二〇〇口　二〇、〇〇〇円

事務所　鳥取市吉方鳥取県食糧営団内に置く

昭和二四年三月三〇日組合員中鳥取地区の業者が組合を造り組合名で加入したため一四名が一名となり、西部地区が九名増加したため二一名となり、出資金を二〇〇、〇〇〇円に増額した。

昭和二四年五月　監事が変更田原清（西部）河島岩蔵（東部）選任

昭和二五年一月　組合員二七名となる。東部二名増、中部二名増、西部三名増、一名減　理事　亀井忠治退任、田原清選任、監事田原清退任、山本茂隆選任

昭和二五年二月一一日　商工業協同組合法が廃止となり、中小企業協同組合法に移行したため必然的に鳥取県パン協同組合に変更する。

昭和二五年五月　鳥取県パン協同組合が鳥取県パン工業会（任意組合）を吸収合併した。

昭和二六年二月　小麦粉卸販売業者として登録

昭和二六年八月　組合員五一名となり二四名増加した。東部一七名増加中部四名増加、西部六名加入三名脱退、主な理由フリークーポン制実施に伴い製パン業者のホトンドが加入した。また東部地区の組合が解散したために増加、事務所を鳥取市今町二丁目二五番地に変更

昭和二六年一二月　出資金を八〇〇、〇〇〇円に増加する。

昭和二七年一〇月　事務所を鳥取市今町九番地に移転、購入した。出資金を二、〇〇〇、〇〇〇円に増加した。

昭和二七年一〇月　理事および監事を増員し下記の通りとする。

理事　柳沢愛之助（西部）平野正行（東部）亀井寛（東部）田原清（西部）藤田孟（中部）鳥羽太喜蔵（中部）山本茂隆（西部）秋山韶亮（東部）

監事　村上善市（東部）岩本怜（中部）三島品子（西部）

昭和二九年五月　組合員三名減

昭和三〇年五月　組合員二名減、四五名

理事下記の通り変更　亀井寛（東部）平野正行（東部）藤田孟（中部）田原清（西部）鳥羽太喜蔵（中部）山本茂隆（西部）秋山韶亮（東部）小椋乙市（西部）

昭和三一年六月　理事定数を一名増加、東部より村上年光新任、監事村上善市、三島品子退任、田中志郎（東部）山田摂智（中部）加本とよ子（西部）選任

昭和三三年五月二五名　組合員一名減（廃業）四四名

理事変更　一名増員となり下記の通り　理事　亀井寛（東部）田原清（西部）藤田孟（中部）秋山韶亮（東部）山本茂隆（西部）村上年光（東部）鳥羽太喜蔵（中部）田中志郎（東部）山田摂智（中部）

退任　平野正行（東部）小椋乙市（西部）

選任　村上年光（東部）田中志郎、山田摂智

監事　小林重太郎（東部）遠藤繁義（中部）小椋乙市（西部）

退任　田中志郎（東部）山田摂智（中部）加本とよ子（西部）

昭和三六年五月　組合員五七名、一三名増

東部五名増、三名減、中部五名増、西部六名増　主な理由は学校給食の実施にしたがい指定工場全員が加入したため理事定員増加に依り四名が追加選任された。

理事　小林重太郎（東部）遠藤繁義（中部）原田友治郎（西部）坂本定雄（西部）

理事増加に伴い監事変更

監事　西尾宗員（東部）山下俊幸（中部）乗本周一（西部）

退任　小林重太郎（東部）遠藤繁義（中部）小椋乙市（西部）

組合事業のうち商行為関係の事業を切はなし新に鳥取県パン商事株式会社を設立移行させた。理由は員外利用が多くなり県より縮少をかん告されたために学校給食部門を残し商行為は廃止した。

昭和三七年五月　出資金を六〇〇、〇〇〇円に減額

理由　商行為を会社へ移行したため、組合員五八名となり一名増

昭和三八年五月　組合員五三名となり五名減、東部二名減、中部一名減西部二名減、廃業に依る

理事下記の通り変更　理事　亀井寛（東部）田中志郎（東部）藤田孟（中部）田原清（西部）秋山韶亮（東部）村上年光（東部）小林重太郎（東部）山田摂智（中部）

退任　山本茂隆（西部）　退任　富田吉明（西部）

理事　鳥羽太喜蔵（中部）遠藤繁義（中部）原田友治郎（西部）坂本定雄（西部）富田吉明

昭和四〇年五月　理事　富田吉明退任（西部）乗本周一選任（西部）

監事　岩本正（東部）山下俊幸（中部）柳沢栄蔵（西部）

退任　西尾宗員（東部）乗本周一（西部）

昭和四二年五月　組合員二名増、一名減

監事　松岡正義（東部）加本政夫（西部）

退任　岩本正（東部）柳沢栄蔵（西部）

以上組合の概況を列記したが、理事として一〇年以上在勤者は下記の通り　藤田孟（中部）二〇年、田原清（西部）一八年、亀井寛（東部）一六年、鳥羽太喜蔵（中部）一六年、秋山韶亮（東部）一六年、村上年光（東部）一一年、田中志郎（東部）一〇年、山田摂智（中部）一〇年

次に組合員の動向を見ると、組合成立以来の組合員数は一〇〇名に達し現在五三名となつて居る。この主な移動の原因としては戦後の食糧難に依り一時的に製パン業を行なつたが、食糧が出廻るにつれて技術的におとる工場または技術的な改革について行けない工場は古い工場であつても脱落して行つた状態で大量製産工場になりつつある工場は戦後に設立された工

場が多くの比率を示めしている。

鳥取県東部中部地区パン工場（創業年調べ）

工場名	創業年	創業者	住所
㈲亀井堂	明治三六年	亀井忠治	鳥取市西町一丁目二〇一
亀井堂		山田俊治	倉吉市大正町一〇七八
藤田製パン所	大正九年	藤田孟	倉吉市瀬崎町
中山太陽堂	大正三年	中山儀一郎	鳥取市川端二丁目
小林製パン所	大正一〇年	小林重太郎	鳥取市立川五丁目
小倉製パン所	大正一二年	小倉房吉	鳥取県八頭郡郡家町郡家
遠藤製パン所	大正一一年		鳥取県東伯郡大栄町由良宿
竹田大正堂	大正一四年	竹田春吉	鳥取市古市
丹波屋	昭和六年	中村久三郎	鳥取県八頭郡佐治村加瀬木
松岡製パン所	昭和八年	松岡秋一	鳥取県岩美郡岩美町浦富
岩本昭和堂	昭和三年	岩本俊雄	倉吉市昭和町
福井製パン所	昭和一〇年	福井修二	倉吉市宮川町
㈱宏栄	昭和一二年	村上年光	鳥取市片原三丁目
田中製パン所	昭和一二年	田中静雄	鳥取市行徳
君司食品株式会社	昭和一三年	田中志郎	鳥取市行徳
岩田ベーカリー	昭和一三年	岩田善蔵	鳥取郡県東伯郡東伯町八橋
谷口製パン所	昭和一三年	谷口忠儀	倉吉市中江
西尾製パン所	昭和一四年	西尾国蔵	鳥取県八頭郡郡家町米岡
岡本製パン所	昭和一四年	岡本中一	鳥取県東伯郡三朝町三朝
山崎製パン所	昭和一五年	山崎忠信	鳥取県三朝町本泉
谷口製パン所	昭和一五年	谷口正男	鳥取市南本寺町
㈲鳥羽本店	昭和一五年	鳥羽太喜蔵	倉吉市住吉町
山本明月堂	昭和一五年	山本武秀	鳥取県岩美郡岩美町岩井
㈲だるま堂	昭和一五年	山名早苗	鳥取市徳尾
小谷日進堂	昭和一七年	小谷睦宏	鳥取県東伯郡赤碕町赤碕
山下製パン所	昭和一五年	山下俊幸	鳥取県東伯郡羽合町久留
富屋	昭和一九年	井上二郎	鳥取県東伯郡東郷町松崎
青木製パン所	昭和一九年	青木忠明	鳥取県気高郡青谷町
河本製パン所	昭和三一年	河本正年	鳥取県東伯郡泊村
佐伯製パン所	昭和三二年	佐伯虎雄	鳥取県東伯郡東伯町美好
智頭旭パン	昭和三三年	米原美智子	鳥取県八頭郡智頭町智頭
岩本権現堂	大正五年		鳥取県八頭郡用瀬町用瀬

島根県パン業界の歴譜

一

茶道で知られる松平不味公の旧城下町松江に英文学者として知られるイギリス人（ギリシヤ生れ）ラフカデイオ・ハーンこと小泉八雲が、松江中学の教師として赴任してきたのは明治二三年であつた。彼はこの土地を愛し、士族の娘小泉節子と結婚のち帰化したが、松江にパン食の火をつけたのもこの小泉八雲であつた。現在松江城の北側にこの小泉八雲の旧居とその記念館があり観光さきの一つとしてにぎわつている。

また明治三〇年には松江市雑賀町にカトリック教会が進出してきた。この教会は母衣町に現存しているが、この教会の初代牧師はフランス国籍のアングレスであつた。

したがつて松江の食パンは、ギリシヤ人とフランス人によつて呱々のこえをあげたことになるが、当時のパン屋は一軒もない。

現存するパン屋を創業順に拾つてみるとざつと次の通りである。

島根県の老舗

創業	社名	代表者	所在地
明治四一年	石原開盛堂	石原才一郎	浜田市殿町
大正五年	松屋ベーカリー	松崎武男	松江市中原町
〃八年	すみだや	島田定道	松江市幸町
〃八年	辰屋	岡田太一	松江市西河津
〃一〇年	松本のパン	松本晋三	浜田市新町
〃一三年	なかす号	中須宏	松江市天神町
〃一四年	川上屋	坂根嘉造	平田市平田町
〃一四年	喜久屋	須藤喜悦	八束郡宍路町
昭和二年	熊谷製パン所	熊谷美貞	益田市益田
〃七年	井谷明盛堂	井谷秀吉	大原郡木次町
〃九年	玉盛堂	鈴木喜造	鍛川郡大社町

ざつとこんなところであるが、このうちのすみだやと辰屋は木村屋系統である。

これでみてもわかるように大正八年から大正末期にかけて誕生したパン屋が多い。これは大正七年の米そうどうに刺激されてパンが代用食として脚光を浴びてきたことのなごりである。

二

県下のパン業者は現在八三名。人口は八二万人であるから、ざつと一万人当り一軒であるが、その大部分は小規模業者であつて、めだつて大規模な業者はない。しかしその中から比較的規模の大きい業者を抽出するとあらまし以下の通りである。

県下の大手しらべ

等級	社名	代表者	所在地
A級	すみだや	島田定道	松江市幸町
〃	辰屋	岡田太一	松江市西河津
〃	松屋ベーカリー	松崎武男	松江市中原町
〃	渡部商店	渡部トシノ	飯石郡掛合町
〃	なんぼうパン	石飛健吉	出雲市今市町
〃	伸和食品	田村稠吉	〃塩冶町
〃	松本のパン	松本晋三	浜田市新町
B級	なかす号	中須宏	松江市天神町
〃	井谷明盛堂	井谷秀吉	大原郡木次町
〃	木村家製パン所	勝部カメ子	出雲市知井宮町
〃	まるやのパン	山本厳	浜田市長沢町
〃	山形製菓	山形直幹	江津市嘉久志町
〃	マルハベーカリー	橘本茂之	益田市益田
〃	寿製パン所	芝田忠一	〃中之島

以上の通りでA級のトップも日産五〇袋程度にすぎない。

三

終戦から現在までの島根県パン協の役員の主なるところを拾つてみると次の通りである。

初代理事長　和田才市（昭二二～二五）
二代目理事長　松崎茂明（昭二五～三二）
三代目〃　中須宏（昭三二～四二）
四代目〃　松崎武男（昭和四二～　）

なお、理事のうち初代から現在まで連続歴のある人に石原才一郎、鈴木喜蔵の両氏があるが、理事歴の古い人に大坂幹枝、島田定道の両氏がある。

初代理事長の和田氏はもと役人であるが、二代目理事長の松崎茂明氏）故人）は統廃期から理事長に就任して困難な転換期のかぢとりをした人で、現理事長松崎武男氏はこの人の後継者である。

四代目理事長

松　崎　武　男

岡山県パン業界の歴譜

一

岡山市天神町にフランス人バツセロン・ヘンリー牧師が主宰するカトリツク教会が進出したのは、西南戦役直後の明治十三年二月五日であつた。この教会の牧師がつくつたフランスパンが岡山県のパンの走りということになるが、岡山県は西日本のパンの本場神戸に隣接しているから、ここには早くから神戸の製パン技術がもたらされた。しかしアメリカに出稼ぎした県民で帰国後パン屋をはじめたものもある。また岡山木村屋によつて米粃だねパン生地法が普及された。

しかしここのパンは岡山の旧制高校と岡山師団によつて普及の端緒が拓かれたということができよう。

二

岡山県下の老舗を挙げればあらまし以下の通りである。

県下の老舗しらべ

創業年代	社名	代表者名	所在地
明治年代	磯田製パン所	磯田　猛	勝田郡勝北町
同　右	備北製菓	石田兼太郎	高梁市新町
大正年代	岡山木村屋	梶谷忠二	岡山市西大寺町
〃	片岡甘美堂	片岡健児	赤盤郡山陽町
〃	森本香栄堂	森本貞義	和気郡和気町
〃	ナラパン食品	村上孝志	西大寺市西大寺
〃	忠臣パン工業所	鍋島竜夫	玉野市宇野
〃	大笠堂食品	小笠原信義	児島郡東児島村
〃	三好満月堂	—	倉敷市味野
〃	玉島製パン所	阿田弥太郎	倉敷市日之出町
〃	松竹堂パン	吉沢義輝	浅口郡里佐町
〃	平川本店	—	総社市総社
〃	新角堂	能勢浜夫	吉備郡昭和町
〃	植月製パン	植月寛一	津山市上紺屋町
〃	松井製パン	松井幸	津山市橋本町
〃	藤田製パン	藤田茂夫	津山市山下
〃	岸本製パン	岸本繁之	津山市川崎
〃	多胡商店	多胡三郎	勝田郡勝央町

〃	高田製パン		久米郡中央町
〃	落合製パン	高山　弘	真庭郡落合町
昭和初頭（企業整備以前）	ツルヤパン	久良甚吉	岡山市富田町
〃	込山日栄堂	込山行雄	御津郡加茂川町
〃	かもや製菓	小川豊一	赤盤郡吉井町
〃	光本製パン所	光本静代	和気郡備前町
〃	武内製菓	武内　覚	〃　〃
〃	宮城宝生堂	宮城健太郎	〃　〃
〃	丹生パン	丹　生哲	〃　〃
〃	亀井堂	亀井　毅	和気郡日生町
〃	南淵製パン所	南淵光治	〃　〃
〃	大賀製パン	大賀道子	玉野市玉
〃	岡野商店	岡野広志	玉野市木目
〃	つるや製パン	佐藤一男	玉野市築港
〃	太陽ベーカリー	井上比市	倉敷市栄町
〃	マルオベーカリー	小野宗一	〃　阿野町
〃	光守商店	光守時央	小田郡矢掛町
〃	頓宮製パン	頓宮亀雄	総社市総社
〃	青柳製パン所	尾藤常市	新見市新見
〃	アサヒパン	坂手民男	津山市川崎
〃	赤松製菓製パン	赤松政夫	〃　坪井町
〃	中村屋	伊藤克美	英田郡美作町
〃	久米製菓商会	鈴鹿光次	久米郡柵原町
〃	平田賀陽堂	難波良雄	上房郡賀陽町
〃	小林豊稔堂	小林源三	〃　〃

以上の通りで明治創業二社、大正創業一八社、昭和初頭（戦前）創業二三社、合計四三社が戦前派であるが、これは岡山全県の業者一五〇社の約三〇％に相当する。

右のうち明治四一年創業の磯田京松（磯田パン〜勝田郡勝北町）さんの場合をみると、氏が広島県三原市でパン屋をはじめたのは明治四一年でときに二十一才であつたが、その技術はアメリカから戻つた三輪というベーカー仕込みのものであつた。その磯田さんが女房の出身地である津山市郊外の勝北町でパン屋をはじめたのは明治四三年であつたが、その製品の大部分は津山連隊に納入したといつている。

これはアメリカの製パン技術の導入経路と、軍隊とパンのつながりを端的に示す事例であるが、岡山木村屋が大をなしたのも岡山師団の御用商人だつたからである。

三

岡山県は人口一六四万人で、岡山市と隣接の倉敷市とその周辺に百万に近い人口が集中しており、この地域と瀬戸内海沿いの各都市がパンの主要市場を形成している。業者数は約一五〇社だから人口一万人強につき一社ということになるが、本県の主要卸パン企業を挙げれば次の通りである。

主要卸企業しらべ

創業期	社名	代表者名	所在地
大正期	岡山木村屋（大手）	梶谷忠二	岡山市
戦後	瀬戸内製パン（準大手）	三宅正男	倉敷市
戦後	武田食品	武田多三郎	岡山市
〃	朝日製パン（中堅）児島学給パン組合	岡山木村屋系	岡山市
〃	永井樟夫		倉敷市

戦前	玉島製パン所	河田弥太郎	〃
戦後	林屋食品	林臣少	都窪郡妹尾町
〃	三宅製菓本店	三宅友一	川上郡成羽町
戦前	植月製パン	植月寛一	津山市
戦後	赤松製菓製パン	赤松政夫	〃
〃	千代製パン	藪木澄夫	久米郡久米町

以上の十一社が主要卸会社であるが、このうち一頭地を抜いているのが岡山木村屋であり、その実力は中国一、これにつぐものが広島のタカキベーカリーである。なお岡山木村屋につぐ大手の瀬戸内パンは昭和三八年に企業合同会社として誕生した異色の会社であつて、この会社は岡山市の丸正製粉と密接につながつている。

四

西日本随一の大手岡山木村屋の社長梶谷忠二氏は、現在岡山商工会議所会頭、日本パン工業会々長として広く知られているが、氏が歩んだ跡を要約するとあらまし以下の通りである。

岡山木村屋年譜

◇…大正八年岡山木村屋創立

◇…大正九年陸海軍一週一回パン食制採用。岡山木村屋第七師団の在岡七部隊用主食パン一手納入御用商となる。大正十四年師団廃止まで継続納入。

市販パンは卸売を排し直売店主義に徹する。

◇…昭和十九年政府の企業整備要綱に則り岡山全市のパン企業を一社に統合、岡山パン製造株式会社を創立社長となる。

この新会社には岡山木村屋の社員は一人も参加せしめず、別に海軍指定梶谷乾パン工場を創立、これに岡山木村屋の社員を従業せしめた。その結果全国唯一の模範的企業合同体となり現存。

◇…昭和二〇年戦災の為全焼。工場疎開先で復興配給パン業務を遂行。

◇…昭和二五年岡山市桑田町に機械化パン工場竣工。

◇…昭和二七年パンの自由販売。株式会社岡山木村屋を創立、岡山パンの製品一手販売機関とする。

◇…昭和三九年倉敷市に日産一、〇〇〇袋能力の完全オートメ工場を新設、食パン専門工場としたが翌年ロールパンラインを併設、近く第三ラインを付設と決定。

◇…笠岡市金崎に笠岡工場竣工。

◇…昭和二七年から全部のパンをエンリッチする。

◇…岡山市新西大寺工場竣工。

◇…

以上の通りでこれを図示すると以下の通りである。

本社（岡山市西大寺町）
- 岡山市桑田町工場（二五〇人）―特殊パン、菓子パン、和洋菓子
- 岡山市新西大寺工場（二〇名）―洋菓子類
- 倉敷市中庄工場（八五名）―食パン・ロールパン
- 笠岡市笠岡工場（二五名）―学給パン、特殊パン
- 朝日製パン岡山工場―卸パン専門
- 梶谷食品㈱―ビスケット専門
- 岡山木村屋―岡山パン一手販売
- ㈱梶谷商店―原料仕入製品販売

前掲の通りこの岡山木村屋は製品の卸売販売を一切行なわず直営店と特約販売店制度を採用、岡山全県下の主要都市と広島県東部と兵庫県西部に特約販売店約二〇〇軒、直営売店二〇店を設置しており、別に卸パン専門の朝日パン（株）を経営している。

この梶谷氏が産業功労者として藍綬褒章をうけたのは昭和三七年であつたが、氏は現状をもつて満足せず中国の梶谷から日本の梶谷への脱皮を念願している。

五

梶谷氏は地元岡山のパン協を昭和十七年に設立、昭和四一年までその責任者の地位にあつたが、現在は前述の通り日本パン工業会会長の要職にある。そんなわけで現在の岡山県下パン協の状況は次の通りである。

◇岡山県パン事業協同組合（理事長藤田茂夫—津山市）
◇岡山県学給パン協力会（理事長三宅正男—岡山市）
◇岡山県製パン事業協組（理事長三宅正男—岡山市）

山口県パン業界の歴譜

一

聖フランシスコ・ザビエルが布教の目的をもつて来朝したのは、一五四九年（天文一八年）だつたから、いまを去る四二〇年前のことである。鹿児島に上陸したザビエルは、北上して京都につき、後奈良天皇に謁して布教の許しを乞うべく努力したが、当時は乱麻のごとくみだれた戦国時代であり、朝廷の権威は地に落ちていたので、無力な朝廷との折衝を断念、当時もつとも繁昌をほこつていた大内義隆の城下町山口に至り、城主に謁しここで耶蘇教布教の第一声をあげた。

こうして山口は南蛮文化の洗礼をまつさきにうけることになつたが、その南蛮文化はパン食文化に外ならなかつた。そんなわけで山口の人々は早くから南蛮人の常食であるパンの存在を知つたのであるが、幕末になるとこの国に再び新しいパン食時代が訪れた。

それは「兵糧」としてのパンの備蓄の必要にせまられたからであるが、長州藩ではこれを「洋製麺麭備急餅」と称した。長州が他に先んじてこのような洋式兵食を採り入れたのは、この藩が藩士の一団を幕府の禁を侵してイギリスにおくり、洋式兵学の習得にあたらせたからである。

長州藩には吉田松陰以下の尊王攘夷の激派が多かつたが、藩政府に重きをなしていた周布政之助、村田蔵六（大村益次郎）らは、攘夷に勝算のないことを見抜き、将来にそなえて文久三年（一八六三）五月、藩士の五人伊藤俊助（博文）志道聞多、野村弥吉（井上勝）遠藤謹助、山尾庸三をひそかにイギリスに送つた。いずれも藩内の親戚知人にも秘しての密航であつたが、翌元治元年八月には四国連合艦隊の下関砲台砲撃事件がおこつた。この事件で外国の実力をいやというほど知らされた長州藩は、薩藩と共にイギリスに接近、尊王討幕へと進んでいつたが、この事件を契機としての本格的な洋式兵制への移行がはじまつた。兵糧パンの採用がはじまつたのもこうした動機からであるが、その技術指導に当つたものは中島治平という者であつた。この人の身許と技術系統は不明であるが、その指導の下に兵糧パンこと「洋製麺麭備急餅」の製造に当つたのは陶工大賀幾助であつた。

この陶工幾助が萩の藩庁へ試験焼きに補助金を出してほしい旨を記した請願書を出しているが、その全文は次の通りである。

御願申上候事　本書申出之趣きを以て、試験焼仰せ付けられ候事
御陣中の兵糧夏日の儀は、別して御貯え六ケ敷しき処、洋人ども兵糧に相用い候パンとか申し候品、甚だ便利の由、申すことに付、中島治平さまより承り居り候而、此度備急餅と号し製造仕り度存じ奉り候
元来麦類を以て相製し候品にて、夏月にても凡そ四十日は相損ぜず、手軽のものにて試めしに製造仕り度存じ奉り候　試験よろしく候而御用にも相立ち候儀に候得ば大局をも相開き度存じ奉り候　焼き調え候に付窯にてまず相試し申し可く候　御費用も少々有之申すべく候得ども廃物にも相成申すまじきに付、追而現在値を以て御払下仰せつけられ候様願い上げ候
手始の上は申出可仕候に付、御見分仰せ付けられ候様宜しく奉願上候

寅（慶応二年）五月

陶工　大賀幾助

御世帯方御役人中様

慶応二年一月には薩・長両藩の盟約成立、六月には第二回征長軍が出発した。そして開戦となつたが、翌七月には家茂将軍が没したので、朝廷の

仲裁でこの無名の出兵は停止された。そして年末には孝明天皇が没し、十六才の明治天皇が即位されることになつたが、この試験焼は長州が天下の大軍を迎え撃つために行なわれたのである。

この請願書に添えられた試験焼きの費用見積りは概ね次の通りである。

覚

一、小麦粉一〇袋（但壱袋掛目五十匁入三分、此代銀弐拾五匁）
一、玉　子一五斤（此代銀六匁）
一、木束　七把（此代銀拾匁五分）
一、職人　下拵より焼調まで手間弐人役（此代銀弐拾匁）
一、〆め　六拾一匁五分　此餅百七十枚弐割壱枚代銀三分六厘二毛

右備急餅小割積前書の通りに御座候　尤も当地麦粉荻より下直に候得ば、少々下直に出来仕るべく候得共、凡そ荻物価の心得を以て申出仕り候

これでみると試験焼は荻の城下でなく、どこかの港町（下関か防府あたり）で行なわれたらしいが、この申請に対して当局は銀四貫匁（六五両）を下付している。

これは危急に直面した長藩が兵糧パンを重視して金に糸目をつけなかつたことの生きた証拠であるが、陶工がその任に当つたのは陶器を焼く窯を使つたからであろう。

幕末から明治初年にかけての相次ぐ対外紛争と内戦は諸藩に軍用パンブームを捲きおこした。それは長州の備急餅にたいして薩州が蒸餅と称し水戸が兵糧丸と称していたことからも察するに難くない。

二

明治以後の山口県のパンについては、長州出身で乃木希典大将の親友だつた桂弥一を挙げなくてはならない。

彼は乃木大将と同じく荻の藩士であつたが、明治維新の際上京近衛兵団の幹部将校となつた。ところが脚気を患つて重態に陥つたのである。そこで築地の外医の治療をうけたが、その外医は彼に木村屋の食パンを与え、これを常食とすることを強いたのである。パンにはビタミンが多いからこれを常食とした弥一はやがて全快した。それ以来彼は木村屋総本店の開祖安兵衛と親交を結んだが、食パンが脚気の妙薬として知られるようになつたのはこの桂弥一の人体実験の成功によるものである。

この桂弥一が郷里にもどつて郷土産業の振興に尽力するようになつたのは明治二〇年代の初頭であつたが、彼はパンを常食としていた。しかし当時荻にはパン屋がなかつたので、門司の村上パンからわざわざ食パンをとりよせてそれをたべていたという。

なお、大正七年の米そうどうはシベリヤ出兵のための軍用米大量買付がその発端となつたのであるが、このときの首相は長州出身の寺内正毅元帥であつた。そしてそのあとを継いだ政友会原敬内閣の陸相は同じく長州人の田中義一大将であつたが、彼は米そうどうの跡始末としてパンの代用食運動を推進、軍隊にパンの給食制を採用した。全国に連隊御用パン屋が出現したのはこの田中大将のおかげであるが、このように山口県はパン食史とは深くつながつている。そういえば明治中期の鹿鳴館時代は欧化風潮が頂点に達した時期であり、そのあおりをくつたパンやケーキが大きく伸びた時代であるが、その欧化風潮の先頭に立つたのは幕末密航してイギリスでまなんだ長州藩士の伊藤博文と井上馨であつた。

三　県下の主なる老舗を挙げれば次の通りである。

創業期	社名	代表者	所在地
明治一〇年	鍵本製パン㈱	松行康博	下関市中の町
大正期	木下製パン㈱	木下一夫	山口市下小鯖
〃	岩国製パン㈱	湯川豊次郎	岩国市岩国
〃	フジキベーカリー		岩国市桜馬場
〃	木村屋	田中義昌	萩市西田町
昭和九年	松月堂製パン㈱	井上薫	宇部市西岐波

これでみると飛切りの老舗は下関市の鍵本パンということになるが、これは下関が本州最南端の港として繁昌した土地であることからいつて決して不自然ではない。また大正期に山口の木下パン、萩の木村屋、岩国の岩国パン、フジキパンなどが相次いで誕生したことは、大正七年の米そうどうの影響とみるべきである。

このうちもと大内氏の城下町山口で大正十一年に創業した木下製パン主木下一夫氏のはなしによると、木下家がパン屋になつた動機は、当時山口の町でパンを焼いていたトルコ人にその製法を習つたからだという。こういう点からいつて木下パンは最初から食パンを手がけたことになるが、はじめのうちは出来そこないが山積した。それは酸味の勝つたパンであつたが捨てるのももつたいないというので、それを乾燥してラスク状のものにし、スパンと称して売つたものだという。それにしてもこの小都市でともかく食パン屋として商売がつづけられたのは、山口に旧制高校があり、そこの学生がパン党だつたからであつた。こういう点からいつて大学、高校などがパン食普及の拠点となつたことがわかるが、木下氏の回顧談によると、戦前要港として栄えた徳山に連合艦隊が入港すると、必ず山口の木下パンに大量のパンの注文があつたという。山口市から徳山市へ出るには防府市に南下してそれから東上する外なく、たいへんなみちのりであるが、木下パンはその度毎に荷馬車にパンを満載して悪路を往き来したものだそうである。

これは当時徳山に有力なパン屋がなかつたことを示すものであると同時に、海軍がパン食普及の役割を果したことを示すものでもある。この木下パンの先代は産業功労者として戦後黄綬褒章をもらつた。

四

山口県の人口は一五四万人、主要都市は下関、宇部、岩国、山口、防府徳山であり、パン屋は約一三〇軒である。従つて人口約一万二千人につき約一軒ということになるが、この中に日産一〇〇袋以上三〇〇袋以下の大手が三軒、五〇袋から一〇〇袋以下の中堅が七軒、二〇袋から五〇袋級の準中堅が八軒ある。以下はその内訳である。

主要業者しらべ

創業期	社名	代表者名	所在地
	（A級）		
明治一〇年	鍵本製パン	松行康博	下関市中の町
大正一一年	木下製パン	木下一夫	山口市下小鯖
昭和九年	松月堂製パン	井上薫	宇部市西岐波
	（B級）		
終戦後	丸仲製パン	仲行弘	宇部市昭和町
〃	天狗堂	山本英夫	岩国市今津
〃	富士製パン	林滋	防府市緑町
〃	ハトヤ製パン	田中清吉	下関市東大坪
〃	キムラベーカリー	木村秀雄	〃西大坪
〃	長寿製パン	松村山純	〃本町
〃	神戸屋	古川士	萩市東田町
〃	協和食品	磯田正一	柳井市宮本東
	（C級）		
終戦後	勉強堂	野中益一	宇部市新天町
〃	山海食品工業	福本隆次	小野田市南竜王町
〃	富宮製パン所	岡田亘	光市虹ケ浜町
〃	東ベーカリー	東早人	岩国市今津
〃	春田製パン所	坂本覚	〃多田
昭和初頭	フジキベーカリー		徳山市桜馬場通
終戦後	岩本菓子店	岩本芳平	厚狭郡山陽町
戦前	武寿製パン所	宮尾幸夫	下松市末武上

これでみると県下の一頭地を抜いた大手は、下関、山口、宇部などの西南部に集中している。それはこの地区の人口が圧倒的に多いからであるが関門の地下国道が全通して以来この地区は北九州経済圏の一環に組み入れられた。その結果北九州に進出した山崎パンがこの山口県南に進出、地元業者と販売合戦を展開している。一方県の東部地区をみると、広島県境の岩国地方には広島の大手タカキベーカリーが進出、ここでも地元業者との対決がおこなわれている。

五

太平洋戦争中の企業整備で県下の業者は一六軒に淘汰されたが、終戦後は委託加工業者が続出、県下の組合も旧実績業者と新興業者の組合に二分された。これが一本化されたのはパンの自由販売が実現した昭和二七年であつたが、この組合は内紛のために昭和三一年にその機能を停止してしまつた。そこでこれにかわるものとして昭和三一年に学給パン組合が誕生したが、三三年になると下関市に地域パン協が生れ、県下の組合は三本立になつた。それが統合されて一本にまとまつたのは昭和三九年で、それから今日まで組合長の職にあるのが、玉野高弘氏である。

玉野氏は徳山市隣接の都濃郡南陽町でパン屋を営む丸玉ベーカリーの主人公で、その経営規模は大きくないが、その円満な人柄が買われている。

なお、左記は県下の組合歴である。

1、山口県パン事業協同組合（昭二七設立―三〇年休業状態に陥る）

2、山口県学組パン協（昭三一設立―三九県下組合一本化の為解散）初代理事長浜野信一、二代目理事長清水達夫

3、山口県パン商工協組（昭三三設立―三九年一本化の為解散）

4、山口県パン協組（下関地区）―昭三三年設立組合一本化の為三九年解散―理事長清水勇一

5、山口県パン工業協組　前記の三組合を統合昭和三九年創立。理事長玉野高弘。現在組合員八八名。

かぎもと製パン株式会社

初代　二代　三代

鍵本芳蔵　松行初治郎　松行康博

住所（本社）

下関市中之町六番九号

現社長（三代）松行康博

株式会社　木下製パン所

初代　二代

木下鶴蔵　木下一夫

住所（本社）

山口市大字下小鯖三七五

現社長（二代）木下一夫

双月堂

初代　二代

林庄一　林滋

双月堂　住所

防府市上天神町七～六

但し　双月堂製パン部企業合同

現在　防府市緑町

富士製パン株式会社

現在二代　林滋氏は同社会長

山口県都濃郡南陽町大字富田二七五二

山口県パン工業協同組合

理事長　玉野高弘

広島県パン業界の歴譜

一

広島県のパンは米国移民の帰国者によつて発展の第一歩をふみだした。そしてそれは他の地方にみられない特色である。

広島は米国移民の給源として知られているが、戦前の米国移民には出かせぎ根性のものが多かつた。惜しみなくはたらいて小金がたまると帰国して生れ故郷にもどり、安定した老後の生活をたのしむというこの種の移民は、アメリカにとつて決してたのもしい移民ではなかつた。低賃金で米国籍労働者の待遇改善を阻止する日本人労働者が、アメリカ人社会に毛ぎらいされるようになつた所以であるが、日露戦争後アメリカに日本移民排斥の火の手があがり、日米関係が次第に悪化していつたのは、こうしたところにも一半の原因がある。

ところでこのアメリカ移民の帰国者は、郷里に戻るとかの地で身につけた職業的経験を足場にして、次々に新しい職業分野を開拓していつた。その一つがベーカリーの経営である。広島市の古老のはなしによると、広島には栗須ベーカリー、むさし屋などのパンと洋菓子の専門店があつたが、これはアメリカから帰国した人によつてはじめられた店だつたということである。これはこれらの店から米国式の製パン技術が拡がつていつたことを示すものであるが、もう一つ広島の特色として挙げなければならないのは、軍隊の果した役割である。

日清戦役のさい広島に大本営がおかれたが、これでもわかるようにこの土地は軍都でもあつた。それは広島に師団がおかれたばかりでなく、隣接の呉市は横須賀、佐世保、と肩をならべる軍港でもあつたからである。陸海軍とパン食の深い因縁については、本文で詳しく言及したからここでは繰り返さないが、機械化製パンのトップを切つたのが海軍だつたことからも、この点は察するに難くないであろう。日清・日露の両戦役には軍用乾パンが大量に用いられたが、広島でもこれがつくられた。こうしたことがこの土地の製パン技術の向上に寄与したことも考えられる。

広島の第五師団と呉海軍工廠の御用パン屋に明治十九年創立の寒月堂と称するベーカリーがあつたが、これは昔の広島の代表的ベーカリーであつた。

米国籍のミス・デイーンスを校長とするミッション・スクールの広島女学院が設立されたのは、欧化風潮が最高潮に達した明治十九年であつたがここではパンの給食とまではいかなかつたが、病人や生徒にたいしては度々パンやスープが与えられた。これが西洋風の食生活を日本人の家庭にもちこむ呼び水となつたことはいうまでもない。

軍都の広島は同時に学都でもあつた。旧制高校や大学がパン食の普及に役立つたことは、中村屋が一高・東大、進々堂が京大を拠りどころにして伸びていつたことからも疑う余地がない。

二

広島の人口は二二八万人で中国第一の大県である。そしてこの県には人口五〇万人の広島、二二万五千人の呉、二〇万四千人の福山などの中都市がある。そしてこの県下には二二〇軒内外のベーカリーがある。これは人口約一万人につき一軒という分布であるが、その大部分はご他聞にもれず戦後派ベーカリーである。

いまこのパン業者の中から主なる戦前派を抽出してみると、あらまし以下の通りである。

戦前派の顔ぶれ

創業	社名	代表者	所在地
大正一二年	ムラコシパン	村越郁之助	広島市旭町
戦前	モーコ製パン工場	室戸一良	大竹市新町
〃	フジヤ製パン	藤井嘉太郎	呉市西谷町

〃	メロンパン	中塩春馬	呉市本通
大正	永井パン	永井勝一	安芸郡安芸町
戦前	西林製パン		安佐郡高陽町
〃	川相製パン所	川相長市	尾道市栗原町
〃	市川商店	市川仁市	尾道市十四日町
〃	広川日進堂	広川博重	福山市東深津町
〃	チドリヤ製パン	井上林三	府中市高木町

以上は戦前派の主なる卸売業者であるが、このほかに多数の戦前派ウインドベーカリーがあることはいうまでもない。

三

現在の主なる卸売パン企業を抽出すればあらまし次の通りである。

主要卸パン店しらべ

区分	社名	代表者	所在地
大手	タカキベーカリー	高木俊介	安芸郡瀬之川町
〃	永井パン	永井勝一	安芸郡安芸町
準大手	広島屋パン	宗綱唯男	広島市草津本町
〃	ムラコシパン	村越郁之助	広島市旭町
〃	天狗堂ベーカリー	桑原久治	安佐郡安古市町
〃	川相製パン所	川相長市	尾道市栗原町
〃	広川日進堂	広川博重	福山市東深津町
〃	池田製パン所	池田友一	福山市御船町
中堅	マツモトベーカリー	松本政尾	広島市草津南町
〃	神川製パン	神川恭一	広島市横川町
〃	モーコ製パン	室戸一良	大竹市新町
〃	フジヤ製パン	藤井嘉太郎	呉市西谷町
〃	メロンパン	中塩春馬	呉市本通り
〃	イカリパン	田村充	呉市三城通り
〃	東食品工場	東日而男	呉市西本通り
〃	藤沢パン	藤沢茂	安佐郡佐東町
〃	西林製パン		安佐郡高陽町
〃	市川商店	市川仁市	尾道市十四日町
〃	るり製パン	阿松勉	尾道市高須町
〃	キヤノンベーカリー	藤本忠夫	福山市西町
〃	福山製パン	徳永新太郎	福山市三吉町
〃	チドリヤ製パン	井上林三	府中市高木町
〃	小川製パン所	小川杉一	芦品郡駅家町

以上の通りであるが、この二十三社のうち一〇社が戦前派でのこり十三社が戦後派である。そしてこの戦前派戦後派を通じての頂点に位するものが戦後派のタカキベーカリーで、その存在は岡山木村屋と共に中国地方の双璧として知られている。

四

復員軍人（陸軍大尉）として、原爆に破壊された広島に帰還した現タカキベーカリー社長高木俊介氏が、広島市比治山町の一角で、従業員四名の委託パン工場をはじめたのは、まだ日本人が食糧地獄に喘ぐ昭和二十三年であつた。それから二十年後の今日のタカキベーカリーは従業員一、〇〇〇名以上、売上年額二〇億円以上の大企業にのしあがつたのだから、まれにみる高度成長といわなくてはならない。

現在のタカキベーカリーの主力工場は、広島郊外瀬乃川町の日産一、〇〇〇袋工場であるが、広島市内比治山町、三原市、愛媛県松山市などにも工場があり、さらに広島市本通りの繁華街にはもと三井銀行支店を改装し

増設した豪壮なレストランをかねた中枢サービスセンター「アンデルセン」があり、呉、福山、尾道、岩国、長崎にもりつぱなサービスセンターがある。

そしてその経営面をみると、昭和三九年から従業員のW・S・T訓練方式を導入、経営の近代化、合理化につとめている。

ここの特色の一つは、幹部職員に自衛隊出身者が多いことであるが、それは命令服従の関係を円滑にして、組織としての戦力を強化するために、自衛隊出身者がよいということに社長が目をつけた結果である。なおここの従業員は男子と女子が殆んど同じ比率を占めているが、これは直売店やサービスセンターが多いからである。経営の方針は中村屋に倣つて良品廉価主義を貫いているが、海外の新智識をとりいれることにも積極的である。

なお、広島県で最初に運行窯の量産方式をとりいれたのは広島市のムラコシパンであり、それは支那事変の直前であつた。戦後いちはやく箱車配達をトラック運搬にきりかえ、さらに機械包装方式をとりいれたのは永井パンであるが、このタカキ、ムラコシ、ナガイの三社がいまも広島県を代表する大手である。

それから広島県の大手は西隣の山口県東部地区、島根県西部地区、海をへだてて愛媛県の西部地区に進出しているが、その東部の福山、府中、松永、尾道、三原地区には東隣の岡山県の大手が進出している。

五

広島県にパン工業組合が呱々のこえをあげたのは、太平洋戦争がはじまつた昭和十七年で、その初代理事長は川野政一氏であつた。そのあとを継いだのが村越郁之助、木村八十二氏であるが、戦後は堀田、田村、中島氏を経て現在の永井勝一氏に至つている。

しかしこのほかにもこの県には福山、尾道方面を区域とする東部パン協（荻路義実理事長）と県北三次市中心の北部パン・メン協（朝枝正己理事長）がある。

広島県北部地区の部

〔広島県北部パン業界の沿革〕

本地区には広島市、呉市、福山市などは含まれていない。尾道市、三原市、三次市などを中心とする双三郡、高田郡、比婆郡、甲奴郡にわたる地域である。

この広島県北部地区のパン業も明治以来の長い年譜を持つている。明治三十一年に双三郡三次町十日市町（現三次市内）に県立三次中学校（現三次高校）が創立され、同校前にパン店が開業したのが本地区におけるパン業の嚆矢である。

大正年代に入つて五年に三次町十日市町において朝枝源治氏（石橋製パン）が菓子とパンの卸業を始め、それと相前後して江草久二、寺本豊、沖田繁人、丸二屋らの諸氏がパンの製造を始めた。ついで大正七年に尾道市のオギロパン、大正八年には三原市のオギロパンが開業、その後昭和初年にかけて、川相製パン（尾道市）岡野製パン（因島市）佐々木製パン（三次市）、小原製パン（三原市）、タカガキ製パン（尾道市）などが相次いで創業した。

当時これらの製パン業者の多くは北備菓子組合に所属していたが、日支事変の勃発した昭和十二年にパン企業の確立をはかつて朝枝、丸二屋、沖田、小林、後藤、政岡、戸崎、矢野、久光らの諸氏は北備菓子組合を脱退して、広島県パン組合（理事長村越郁之助）に加入した。しかし大戦中の小麦粉の統制、企業の整備により本地区の製パン業者は朝枝源治氏を残して全員転廃業し、パンの小売は食糧営団に吸収された。

終戦後の昭和二十一年に石橋製パン（朝枝源治氏）とアサヒダ製パン（朝枝理三氏）は、農林省配給パン委託加工工場に指定されて、配給パンの製造を行なつた。当時食糧不足のためにパン食が普及し、本地区内にも多数のパン業者が乱立したが、年とともに次第に自然整理されていつた。

昭和二五年三月に双三郡、高田郡、比婆郡、甲奴郡（三次市庄原市を含

む）内のパン業者三四名が十日市町西覚寺に参会して、広島県北部パン協同組合（理事長後藤豊三郎、専務理事朝枝源治）を創立した。この組合は同二五年十月に広島県北部パン麺協同組合と改称した。

以後この組合は小麦粉、砂糖、イースト、油脂、ジャムその他の資材の共同購入を行ない、従業員や家族の表彰と慰安、パンや菓子の講習会、見学旅行など、購買、厚生、親睦の事業活動を行なつている。

広島県北部パン麺協同組合が行なつてきた主な事業と行事をつぎに記してみよう。

昭和二十九年には和菓子の講習会とパンの講習会を開き、地区別対抗の軟式野球大会を行ない、昭和三十年には日油後援の下に講習会を開催した。昭和三十一年には組合が自主的に衛生週間を実施し、各パン工場の衛生施設の充実をはかり、ポスターを作成し配布した。昭和三十二年には全パン連主催のパン祭に参加し、本地区内で賞金一万円当選者一名トースター当選者二八名を出した。昭和三十三年には広島市食品試験場で学給製パンの講習を行なつた。

昭和三十五年には県下四地区のパン組合が協調して日額二〇五円の最低賃金制を実施し、三十七年に二六〇円に改定、三十九年に三五〇円、四十年に四〇〇円、四十一年に四四〇円に改定した。

昭和三十六年には組合創立十周年記念式に組合員工場の従業員の十年と五年の勤続者を表彰、三十八年には永年勤続の組合役員を表彰した。

この組合は創立以来今日まで引続き小麦粉、バター、ジャム、水飴、イースト、包装材料などを、毎年北部地区全需要の九五％にあたる分量を共同購入して、組合員に大きい利益を提供している。また家族や従業員のリクレエーションに力を入れ、毎年有意義な県内外の慰安旅行、見学、親睦行事を行なつている。

広島県北部の調査（二〇社）

調査対象　二〇社（尾道市八、三次市三、三原市二、因島市一、御調町二、その他四）

調査内容　本調査は尾道市、三次市などを中心とする広島県北部パン組合所属の製パン企業体二〇の調査である。

(1) 業　態　二〇社中卸売を主とするもの一八社で大多数をしめ、小売を主とするものは二社にすぎない。また卸売業一八社の中学給パンを行なつているもの一四社に達している。さらに製造しているパンの種類によつて区別すると、食パン、菓子パンの両方をつくつているもの一四社、食パンのみをつくつているもの二社、菓子パンのみをつくつているもの三社、不明一となつている。

(2) 創業期　本調査中で創業期がもつとも古いのは石橋製パン（三次市）で、大正五年の創業である。ついで尾道市と三原市の両オギロパンがそれぞれ大正七年と大正八年の創業で古く、大正十二年にはアサダ製パン（三次市）大正十三年には川相製パン（尾道市）が創業している。昭和元～八年の期間に、岡野、佐々木、小原、タカギの各製パン所が創業しているが、その他の一一社はすべて昭和二十年の終戦以後の開業であり、特に昭和二一～二五年の五年間に九社が開業している。

(3) 代表者の代目と年令　調査企業体二〇社の代表者二〇名の中、初代が十七名、二代が三名、三代以上はなしで、初代が圧倒的に多い。代表者の年令は七〇才以上一名、六〇～七〇才七名、五〇～六〇才五名、四〇～五〇才五名、三〇～四〇才二名となつている。

(4) 技術系統　木村屋系二、向島住田系一、中国で中国人より習得一となつているが、木村屋系の一社は岡山市の木村屋（梶谷忠一氏）の初代職長から技術を伝えられている。その他弟の仕事の手伝いから、神戸で修業したなどがあるが、技術系統は不明である。

(5) 窯と製パン機械　大正時代と昭和初年に創業したパン店はすべて石窯か煉瓦窯を使用しているが、終戦後に開業した店の中にも石窯煉瓦窯を採用しているものがある。電気窯とガス窯の使用もかなり早く、両オギロパンはともに大正十年にガス窯を、大正十二年に電気窯を採用している。

さらに昭和四年に川相製パン（尾道市）が、昭和十二年に佐々木製パン（三次市）が昭和十三年に小原製パン（三原市）が電気窯を採用している。しかし電気窯の使用が普及したのは終戦後である。

現在ガス窯の使用者は五社、オイル窯の使用者は三社となつている。

窯以外の製パン機械ではミキサーの使用がもつとも早く、現在もつとも広く普及している。ミキサーを始めて使用したのは昭和九年川相製パン所（尾道市）であるが、終戦までに他の六社がミキサーを採用している。デバイダーとモルダーも昭和十三年に川相製パン所が採用したのが最初であるが、その他の業者はすべて終戦後に使用を始めている。現在モルダーは二〇社全部が使用しているが、デバイダーは使用していないものが八社もある。

自動包装機その他を使用しているのは七社で、いずれも昭和三五年以後の採用である。

(6) 発酵法の推移　ホップス種使用の食パン製造を報告しているのは石橋製パン（三次市）と川相製パン（尾道市）の二社であり、前者は大正五～九年の期間に、後者は大正十三年～昭和三年の期間にホップス種を使用している。南京種の使用を報告しているのは両オギロパン（尾道市と三原市）のみで、その使用期間は大正八～一〇年である。

酒種使用の菓子パン製造を報告している業者は九名であるが、大正末期から昭和初年にイースト種に変えたものが多い。しかし昭和一五～二〇年まで酒種を使用した業者もある。イーストをもつとも早く使用したのは昭和二年の石橋製パン、昭和四年の川相製パン、昭和五年の岡野製パンなどである。終戦後三年間米国製のドライ・イーストを使用したと報告しているもの（片野製パン）もある。

配達方式の推移　パン配達の箱車時代を記しているのは佐々木製パン（三次市）のみであるが、昭和六年で終つている。リヤカー時代を報告しているのは一〇社で、二社は大正七年にやめているが、他の八社は終戦後も継続しており、昭和三二年までリヤカーを使用したものも一社ある。

貨物自動車は昭和十二年頃から二、三社が採用したが、終戦後特に昭和二五年以後急速に普及し、現在調査した二〇社中の一九社が使用している。自転車を使用しているものも三社ある。

(8) パンの種類　他の府県と同じく大多数のパン業者は食パン、菓子パンの両方をつくつており、広く普及していることを示している。直焼きパンも大正五～七年頃から三次市、尾道市、三原市で始まり、現在二〇社中の八社がつくつている。スイート製品の製造は昭和三十年頃から始まり、現在七社がそれをつくつている。

(9) 雇傭関係の推移と労組　年季奉公制度を報告しているのは二〇社中の八社であるが、それをやめた年代についての記録は昭和元年から昭和二十八年までの各年にわたり明確な廃止期を示していない。終戦前に四社が終戦後に四社が古い年季奉公制度に別れを告げている。終戦後開業の一一社中九社は最初から徒弟制度を使つていない。

従業員組合の成立を報告しているのは橋和精和堂（御調町）一社だけで昭和二六年にできている。

(10) パンを始めた動機　創業期の古いパン業者の動機には小資本でできたから、徒弟から独立開業、船員生活がいやで転職などがあり、終戦後に開業した業者の動機は戦後の食糧不足を見て、復員や外地引揚後の職業として、パン業が有望と考えてなどである。他の製パン工場を買収または引継いで開業したものも二社ある。

広島県の部（二〇社）

創業期	社名	所在地	代表者名	年令	代目	営業形態 卸売	営業形態 直売	営業形態 学給	技術系統
大正五年	石橋製パン	三次市	朝枝源治	七六	初代	○			
〃七年	オギロパン	尾道市	荻路義実	六五	初代		○		
〃八年	オギロパン	三原市	荻路幸一	六九	初代		○		
〃一二年	アサエダ製パン	三次市	朝枝理三	六六	初代	○		○	

〃	一三年	川相製パン	尾道市	川相長市	六二	初代	○		○	岡山
昭和	元年	岡野製パン	因島市	岡野準一	六六	初代	○		○	木村屋系 向島住田系統
〃	六年	佐々木製パン	三次市	佐々木薫	五七	初代	○			
〃	七年	小原製パン	三原市	小原道彦	四二	二代	○		○	
〃	八年	タカガキ製パン	尾道市	高垣秀夫	六一	初代	○		○	
〃	一一年	橘和清和堂	御調町	橘和寛次	六七	初代	○		○	木村屋系
〃	一二年	神森誠心堂	尾道市	神森誠三	三六	二代	○		○	中国で習得
〃	一二年	まるた製パン	尾道市	高橋石夫	五九	初代	○		○	
〃	二三年	片野製パン	上下町	片野繁一	五九	初代	○		○	
〃	二四年	富永製パン製菓	甲田町	富永誠治	三七	初代	○		○	
〃	二四年	松浦製パン	世羅町	松浦正二	五二	初代	○		○	
〃	二四年	森島金水堂	御調町	森島茂雄	五四	初代	○		○	
〃	二五年	渡辺製パン	三良坂町	渡辺美徳	四三	二代	○			
〃	二五年	るり製パン	尾道市	阿松　勉	四三	初代	○		○	
〃	二六年	丸芳製パン	尾道市	農間基国	四六	初代	○		○	
〃	三一年	黒田製パン	尾道市	黒田道男	四九	初代	○			

八、四国地方パン業界の歴譜

一、沿　革

当地方のパンの歴史は比較的みじかく、最古の老舗は高知市で明治二八年に創業した門田製パン所である。ついで明治三〇年には香川県の善通寺に師団が設けられ、その御用商人として松尾製パン所が誕生した。

従つて企業としてのパン屋の誕生は日清戦争時代ということになるが、実際にこの土地でパンが知られるようになつたのは明治十年代と推定される。記録によると今治教会（愛媛）の誕生が明治十二年、高知教会の誕生が同十八年であり、これらの教会では洗礼のときにかならずパンと葡萄酒を用いたからである。なお明治十九年には松山東雲女学校が誕生し二四年には松山に同じくミッション・スクールの松山学院が誕生しているが、ここでもパンが用いられた。

二、現　況

以下は当地方のパンの概況である。

以上の通りであつて当地方の対総人口比率四％にたいして、対総製パン高比率は三・三％であるから、パンの普及度は全国平均を下廻つていることになる。その原因が都市化のおくれにあることは、対総人口比率四％にたいして市部人口が三・一％で郡部人口が六％であることによつてあきらかである。しかし製パン高の内訳をみると、対総製パン高比率は三・三％であるが、市販パンは三％、学給パンは四・四％であつて学給パンの普及率は相当高い。企業規模をみると、三〇〇kw以上の大型工場は絶無であるが、これはこの地方に大型都市がないからである。

なお県庁所在都市のパン食率はだいたい全国平均に近いが、そのトップを占めているのは高松市である。